

外部式フィルターの元祖

# エーハイム社に聞く



エーハイム氏  
(ギュンター・エーハイム/  
Gunther Ehim)

## 外部式フィルターのそもそも話

水草レイアウトにはセットといってもいい外部式フィルター。水草好きのアクアリストは当たり前のように使っていると思う。しかし、このフィルター、見れば見るほど不思議な存在だ。わざわざ水槽の遠いところにキャニスター部を作るなんて、普通は思いつきそうもない。そこで、このインタビューでは、外部式フィルターを開発したドイツのエーハイム社に、外部式フィルターの「そもそも」をお聞きした

協力/エーハイムジャパン(株) まとめ/編集部

※フィルターを開発したエーハイム氏(ギュンター・エーハイム/Gunther Ehim)はたいへん高齢であるため、エーハイム社にお勤めのエーハイム氏に近い方にいただいた回答をまとめたものです

—エーハイム氏が外部式フィルターを開発した1963年当時、ドイツではどのような魚に人気がありましたか？(エーハイム氏は何を飼われていましたか？)

**エーハイム社** プラティ、ディスカス、グッピーなどです。

—当時、エアリフト式のフィルターはあったそうですが、エーハイム氏はそれらのどんな点に不満を持ちましたか？

**エーハイム社** 生物ろ過の能力が低い、ユーザーの使い勝手が良くなかった、流量が低い、といった点です。

—このフィルターの心臓部ともいえる、マグネットポンプもエーハイム社の開発なのでしょうか？

**エーハイム社** エーハイム氏は、1949年に鉄道や車両の模型を作る会社を設立し、1962年には模型の噴水に使用する目的で小型のマグネットポンプを開発しました。

そして、1963年、このマグネットポンプを使用した外部式フィルターを市場に導入しました。これはアクア業界では初めての試みであり、この技術はアクア業界にとって大きな技術的躍進となり、その後の外部式フィルターの原点となりました。

ちなみに、1960年代には、このマグネットポンプは他の分野、例えば、医療機器、研究開発室、工業生産部門などでも多く利用されていました。

—マグネットポンプを使用した外部式のフィルターは、エアリフト式のフィルターと比べだいぶ水の循環が異なるものだ

と思いますが、そのアイデアは何から得たのでしょうか？

**エーハイム社** 開発した小型マグネットポンプの医療機器分野での成功をみたエーハイム氏は、自身がハイ・エンドのアクアリストでもありました。性能的に満足していなかったそれまでのろ過装置に代わり、ろ材となる地層を何層にもわたって水が通過する自然のろ過のメカニズムを、このマグネットポンプを利用して再現できないものかと考えました。これがマグネットポンプとキャニスター(水槽外に設置するろ過槽)を利用した外部式フィルターのアイデアの起源です。

—水槽の外部へ水を循環するという点で、開発には多くの課題があることが想像されますが、もっとも困難であった点はどこでしょうか？

**エーハイム社** このシステムの「心臓」となるマグネットポンプ部分は、すでに医療機器分野で“トライ&テスト”を繰り返して技術的検証を重ねていました。また、特に注意したのは“水漏れ”についてです



1970年代のエーハイム。現存するものでは最も古いものではないか…とのことだが、その構造は現在のものとほとんど変わっていない(エーハイムジャパン(株)にて)

—耐久性の高さも特徴とされていますね。これは、開発当初から力を入れていた点なのでしょうか？

**エーハイム社** エーハイム氏は、エンジニアとして常に最高の品質と耐久性をエーハイム・ブランドに求めています。この精神が、最先端の生産設備の採用と、それまでの常識では考えられないほどの長期にわたる市販前の商品テストなどといった、自社製品の品質向上活動に反映されています。

—ろ材について。エアリフト式では用いることが難しい形状のろ材(リング状、碎石状)が、外部式フィルターには使われています。これらのろ材も、外部式フィルターとともに開発したのでしょうか？

**エーハイム社** その通りです。外部式フィルターのろ過能力をより向上させるべく、同時に開発しました。

—外部式フィルターはエアリフト式のフィルターと比べ、使用にはコツも必要と感ずます(たとえば、自動的にエアレーションされないのも、ともすると水槽内が酸素不足になりやすい)。当時、それら新しい特性のため、使用者から戸惑いの声寄せられたことなどはありましたか？

**エーハイム社** 特に戸惑いなどは聞かれませんでした。ユーザーは、当時最新のこの優れたろ過システムを大いに歓迎してくれました。

—ある記述をみると、エーハイムの外部式フィルターが各国で使用され始めたのが、1970年とあります。この世界で普及した時期に意味があるのでしょうか？

たとえば、外部式フィルターと相性のよい生体が流行った、など。

**エーハイム社** 1963年より外部式フィルターは製造を継続しており、特に1970年に大きく伸びたということはありません。以来、年を追うごとにこの

製品に対する需要が高まりました。そして、1970年にはアクア事業に専念し、これを拡大するべく模型部門の売却を断行しました。

—水草との相性がよいこと。これは、開発当初から意識していたことなのでしょうか。

**エーハイム社** 開発当初より、水草水槽だけを念頭に開発はしておりま

せん。最初から、ほとんどのホビイストのニーズに応えられるよう、フィルター本体はもとより、さまざまなニーズに対応するための便利な各種アクセサリーなどを豊富に開発しております。そのため、日本以外の他の国では、弊社の外部式フィルターは水草以外の飼育、例えばシクリッド、海水魚、一般の熱帯魚、金魚などでも大いに使用されています。



阪本賢治氏

本文のエーハイム社へのインタビューを補う形で、エーハイムジャパン(株)の代表をつとめる阪本賢治氏にお話をお聞きしました

—1960年代からあるとは古いですね。1963年といえば、東海道新幹線が開業する1年前です。

**阪本** その間、基本的な構造はほとんど変わっていません。

—堅牢であることが特徴になる製品ですが、その点については。

**阪本** まずは、原材料が優れていることが挙げられます。そして、組み立て精度も高く、10年以上使われているユーザーも多くいます。この緑色も、紫外線で劣化しないなどの理由でつけられたものでしょう。機能にはひとつひとつ理由があります。その点は、ドイツ人らしいこだわりですね。核となる基本性能に力を注ぐのです。

—外部式フィルターが発売された当初のドイツでは、すんなり受け入れられたとありますが、その点が不思議です。

**阪本** そこは国民性です。日本人は、商品があると、それに付属する細かいマニュアルにしたがって使用する傾向がありますね。しかし、ドイツ人は違います。商品があれば、まず構造を理解して、その使い方を自分

なりに工夫する。ですから、この新しいフィルターに対して、戸惑いの声がなかったのでしょうか。

—ところで、水草には外部式というイメージがある私にとっては、あまり水草を考えていなかったというのは新鮮です。

**阪本** 様々なシーンに対応するフィルターを作ったということでしょう。これについて補足すると、もともとヨーロッパではバランスドアクアリウムという考え方が主流です。「水草をたくさん植えた水槽に魚を少し」というように、自然に近い飼育環境を再現しようとするのです。ダッチアクアリウムはまさにそうですし、海水魚もシクリッドの飼育も同じように考えます。そういう飼育スタイルに適合するフィルターとしてこの外部式フィルターが作られたわけですから、全てのシーンに対応するわけです。

—では、日本では外部式=水草というイメージが(少なくとも私に)あるのは、どうしてでしょうか。

**阪本** 1980年ごろの話になりますが、ヨーロッパにおけるバランスド

アクアリウムの考え方が、日本へ紹介されたからですね。どういうことかということ、すでにあったヨーロッパの商品を、フィルターや肥料というひとつずつではなく、「バランスドアクアリウムのためにこの水質調整剤とこの肥料とこの試薬とこの外部式フィルターが必要ですよ」というように全体から個々を提案する、販売の戦略を立てたんです。

—バランスドアクアリウムというパッケージが宣伝されたということですね。それを構成するひとつがエーハイムであったと。

**阪本** 日本人は新しいものが好きなこともあって、この提案はものすごく受け入れられました。それでバランスドアクアリウム、つまり、(淡水では)水草がたくさん植えられた水槽=外部式フィルターという風に着目したのではないのでしょうか。水草のたくさん植えられたバランスドアクアリウムは誰が見てもすばらしいですからね。

—それが水草のブームもあって広まっていたと。

**阪本** エーハイムの外部式フィルターが本格的に日本へ導入されたのは1982年です。その後、日本国内で水草を装飾的に用いたアクアアートなどの流行もあり、水草がブームになりました。そうした流れに、このエーハイムがうまく適合したということでしょう。

文中敬称略